恐竜の作り方

高橋　陽子

年長になっての五月。仲良し四（＋α）人組の男児たちは、恐竜の本に夢中だった。恐竜の本といっても、図鑑。保育室には二冊しかない。たくさんの本が備わっている保健室からも借りてきて、長方形の机を二個つなげてあるところに広げて見ている。借りてくる、ということでは子どもたちの方がよくわかっていて、「保健室に、もっとあった」ときちんとわかって取りに行く。恐竜の本に限ることではない。ブームになっているのは妖怪や昔話系の本。恥ずかしながら、私はブームということを知らなくて、誰かが保健室から借りてきて、保育室にそのままになっているのに気づかずにいて、他のクラスの子どもたちに大変迷惑をかけてしまったこともある。ようするに、他のクラスの子は、当然保健室に行けば妖怪・昔話の本に出会えると思って行く。いくら探してもない、のであるから、どんな思いをし

ていたことか。

毎年必ず恐竜に興味を抱く子どもたちがいる。大恐竜展がある年には、「何回もせがまれて行ってきました」という保護者の報告を受けることもある。家庭では「恐竜、恐竜」と言っているだろうに、幼稚園ではあまり言わない子どももいるし、一人で恐竜の図鑑をじっくり見ている子どももいる。

恐竜に対する興味や思いをどのような形に表現するかは、子どもによって違う。が、どう表現すると子どもの興味を損なわずに、興味のある子ども同士、又「知っている」程度のレベルの子どもにでも、共有できるものになるかしらと、悩むところである。子どもたちの興味のままにこちらが見ていることも必要とは思う。ただ、せっかくの知識を個人や仲間内だけには留まらせずに、できたら発信源になって欲しい。又、発信することで、恐竜には興味はあるけれどいつも遊んでいる人ではないからという理由で離れたところから見ている人にも、一緒に発信源になってもらいたい、それが、仲間関係を広げることにつながって欲しい、などと考えたりする。

が、恐竜というキャラクターは「これ知ってる」「見たことがある」から「草食だ」「肉食だ」という辺りの話は盛り上がるが、それぞれが話すだけになる場合が多い。子どもの遊びは、年長児になると、話から始まることも多くなるが、話の先に実際にからだを動かしたり、何か作ったりという行為が伴わないと、しぼんでしまうものである。図鑑を見ながら会話する仲良しグループの子どもたちは、どうなっていくのだろう、私はどう関わっていこうかと、いつもながら思案していた。

そのグループとはあまり遊ば

ないKくんとそのグループに関心のあるMくんが、図鑑を横から覗いて恐竜の絵を描き始めた。紙は、普段子どもたちが案外自由に使える八つ切りを半分にした大きさの画用紙である。グループの子どもたちも「紙だ！」という誰からともない声に動かされて、紙を取りに行き描き始めた。

実際の恐竜は十階建てのマンション以上に大きいものもいる。八つ切りの半分ではとうてい収まるはずがない。が、子どもたちは図鑑を見て、自分なりに描き写している。図鑑の中の恐竜であれば、その大きさの画用紙でもいい。また、何度も失敗する。こちらが見ると、なかなかいいじゃない、というものでも「失敗、失敗」と言って、新しい紙にまた描き始める。失敗作は時にはくしゃくしゃと、丸められてしまうこともあるので、あまり大きい紙でなくていい、ともいえる。何とかお気に入りにできたものを、見せに来てくれた。そこで、「立つようにもできるけど」と言ってみる。「する、する」とはさみを持ってくる。子どもが切り取ったものを持ってきて、私が裏に支えをつけて、そっと立たせる。

立つことで命を吹き込まれたように見えたのだろう、うまく描けない子どもが「描いて」とやってきた。一つ描けば次々に描いて、と来ることは百も承知であった。でも、同じように一人が一つ持つことで何かが始まるかもしれないと考えた。また、このクラスは四月から担任していて、このグループとはなかなか接点を持てないできた。大人より友だちとの関係を優先するHくんが私を頼ってきてくれた。これらが私の頭に一度に思い浮かび、「どれを描くの？」と聞いていた。その恐竜の枠を描くことにした。色を塗ったり切ったりすることは子どもの手で。私が描けば、どんな色の塗り方であっても本物らしく見えてくるようで、想像の通り「これを、描いて」という声が続いた。「〇〇くんは、持ってい

るでしょう?」と言えば「ぼくはまだ描いてもらっていない」と言われ「一つ描いた人はそれで遊んで欲しいのだけど?」と言えば「○○くんと同じ恐竜が欲しい」「まだ肉食しかない、草食もいたはずだから」と言われ、そう思うのは当然だよね、と思いながらもどこかで切らなければいけなくなると焦りもある。

Kくんや Mくんと仲良しグループは、同じ空間で同じものを作っていても直接会話することは殆どない。それでも、作ることに関してはお互いに影響し合っているのは明らかであった。作ることに追われながら次の展開を考えてみても、恐竜の世界を作って、そこで動かしながら遊ぶ、程度しか思いつかなかった。しかし今は、子どもたちの気持ちはたくさん自分のものが欲しい、ということなんだ、と自分に言い聞かせたりしていた。

恐竜の支えであるが、思いつきでその辺にあった残り紙を使ったので、立つのもあればだましだましでやっと立つものもある。何年幼稚園の先生をしているんだ、と自分で情けなくなっても、あとのまつり。「先生、すぐ倒れるよ」と訴えられる。それを直しながら、線を描き、新たな支えをつける。私があまりにもたもたしていると子どもの方が心得ていて、自分で支えを作りつけるようになっていった。

さて、日を空けることがあっても、恐竜作りは続いた。水に住む恐竜もいたので、青いビニール袋を広げた。「水のこっちはこうなってるよ」とジェスチャーで土手があることを示すSくん。段ボールを持ってきて、やってみるがなかなかイメージに合わない。Sくんが「それでいい」と言わない限り仲間たちも頷かない。何とかそれらしきものができた。子どもたちは、水の上と地面とにそれぞれ恐竜を置く。私が肉食恐竜を持って草食恐竜を追いかけると、一緒に動かしてみるが私が離れると、恐竜遊び

は終わり、キャラクターごっこをするために外に出て行こうとしていた。キャラクターごっこなら、イメージを共有できからだをたくさん動かして遊べる。いつもの仲間関係の勾配の中で遊ぶことができる。そう思いながら見送った。

恐竜作りが始まってしばらくして、親子で遊ぶ日があった。土曜日に行うので父親が来る人が多い。父親にアイディアをもらって、何か盛り上がるようにできないか、と密かに楽しみにしていた。四人グループのうち三人までが父親であった。雨であったのと父親が来ることは滅多にないのとで、親子とも緊張していて何をしていいかわからない感じだった。「こういうのを子どもたちが作っているのですが、恐竜ワールドのように、何か工夫できないでしょうか」と声をかけてみた。子どもたちは恐竜の図鑑を持ってきて、描いてもらっていた。それを見て母親と来ていたKくんも隣に座る。父親たちは言われるままに描いてあげているが、Kくんは自分で描いていた。あとで聞いてみると「本人が自分で描きたいと言ったから」とのことだった。Sくんの父親に「恐竜が住んでいた世界を作ってみませんか?」と誘う。段ボールを持ってくると、ついたてのようにコの字に囲めるようにし、火山の絵を描く。大昔に存在したような木を作り立ててもくれた。

恐竜ワールドはできたが、そこにみんなが集まって何かが始まるということはなく、次々に恐竜だけが増えていった。Kくんは、自分の作りたいものが出来上がると、違うことをしに行った。「作ってみませんか?」と声をかけたために、親子の時間を制約してしまったかもしれないと自責の思いだった。とともに、父親でさえ、恐竜を作りそこで遊ぶことは難しいんだな、三人の子どもたちの関係に入り込めないものがあるんだな、ということも感じてい

た。

親子で遊ぶ日以降も、子どもたちは見て、描く日が続いた。非常勤の先生に頼んでまで、描いてもらい自分のもの、を増やしていった。

私が以前務めていた園では、作品展という行事があった。日頃の個々の作品を保護者に見てもらうとともに、学年でテーマを決めてクラスごとに全員が関わって大きな作品を作り展示する日でもあった。年長組のテーマは、恐竜だった。立体的に、見栄えのする大きさに作るのである。子どもたちと、どの恐竜を作りたいか決める。その際には、クラス全員の前で図鑑を広げ、前もってこちらが考えておいた馴染みのあるものや特徴的なものについて説明する。その中から二体を選び作り上げていく。一度にはできないので、少しずつ関わるようにする。例えば、段ボール箱で骨組みを作るところは、○○グループさん。そこに、丸めた新聞紙をつける。全員が一、二個丸め、グループ毎に段ボール箱につけに来る。新聞紙をつけることで、ふくらみを持つ。その上に色が塗れるように白い紙を貼っていく、手や足をつける、顔を作る、など少しずつみんなで作るのだ。担任である私も、あとどの位で完成するのかの予測がつかなくなってしまうほど大変で、何とか恐竜らしきものになった時には疲れ切ってしまい、解放された嬉しさを感じたものだった。立体的であり、質感や大きさのわかるものとなったので、子どもたちには達成感があったとは思うが、記憶は定かではない。

今年担任になった仲良しグループの子どもたちにとっては、興味を持った恐竜をとことん描いて、自分のものにする楽しみがあるのだと思う。時々私に促されて父親たちと作った恐

竜ワールドで遊ぶこともあったが、入りきれないほどの数になった。恐竜の博物館のようにしてみようかと思うこともあったが、まだまだ描いていない恐竜がある、と作り続ける子どもたちを見ていると、満足していない気持ちのままでは友だちに発信する力は、本来持っている力を発揮しきれるほどにはならないよねと思い、声はかけないでいる。

一学期も終わりに近づいた。いつものグループ内でいざこざがあり気持ちが建て直せないでいた、恐竜が大好きという女児Nさんに「一緒にやってみる？」と声をかけた。少しはにかんだような表情ではあったが机に向かった。恐竜好きなだけあって、特徴を捉えて描いている。絵が上手いというわけではなかったが、本物らしく感じさせられたのだろう、描いて、と男児たちに言われる。一日かけてお願いに応えて描いてあげていた。翌日も、朝から机で図鑑を広げる男児たちの中にいる。しばらくしてから、NさんとHくんに「うちわを作ろう」と声をかけた（毎年夏休み前にうちわを作っている）。竹製のうちわに、和紙のちぎり絵で模様を描いていく。二人とも期を逃してやっていなかった。手先のことが好きではないHくんだったが、恐竜描きに多少閉口していたNさんが場所を移動したのについて行った。完成すると、違う遊びをしていた仲良しグループに戻っていったが、このまま夏休みになってしまうのがもったいないような感覚が私には残った。

終業式前日、作品を持ち帰る。仲良しグループの子どもたちもKくん、Mくんも、自分のもの、と確認しながら袋に入れていく。二学期、幼稚園が始まったらまた持ってくるのだろうか。今度はこちらの思いを伝えてみようか、もっと発信源になるように、もっと大勢が集えるようにと思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）